

幼児教育への反省



堀内 康人

どんな本の中で読んだのか記憶がはっきりいたしません。プーシキンがこんなことをいっていたようです。

「文学というものは地上と天上を統一するためのものだ」と。どうしたことか、私の頭からいつもこのプーシキンのいったことが離れません。地上というのは具体的現実のことであり天上というのは抽象的世界のことでありましょう。さて私は文学についてこれから語ろうとするのではありませんが、多くの学者を含めて、幼児教育の現場の教師・保育者がプーシキンのいったように、たとえそれは文学ではないにせよ、子どもというものや子ども

の生活を言葉によって的確に説明し、理解し、それをものに正しく指導しているであろうか、ということを考えて、必ずしもそうなっていないことがあまりにも多すぎるような気がいたします。なぜでありましょうか、それは言葉が現実から離れて独り歩きをはじめ、いつの間にか具体的な現実の複雑さを根気強く追いかける努力を放棄し、その代りに教育学者や心理学者の作った言葉でうまく格好をつけ、それでおいしい味付けがかわった、食べてごらんさい、おいしいでしょう、というようなことが多いからです。ですからご無理ごもつとも

の感想はあっても、そこから子どもの生活に、ぐんとせまり、「そうか、こうして見ようか」という指針のよう

なものがでてこないのです。ちょうど「秋」について子どもに書かせた作文、いわゆる美文調、「秋は良い季節だ、天高く馬肥ゆ、天神山のもみじも色づき、谷川は澄んで流れる。秋はほんとに良い季節だ、灯火親しむ候だ、さあしっかり勉強しよう」といった調子が多く、「秋になった、山が紫色になったぞ、あけびをとりにいこうかな」といった子どものレアリズムから受ける感動のようなものがあります。そこで私は、きちんとしたことをしゃべりきちんとした指導をするためにも、私どもがしらずしらずのうちにおかしている考えの上の誤りについて反省をして見たいと思います。

一、あれかこれか、という考え方の誤りについて

あの子はひねくれているがこの子はひねくれていないなどよく子どもの問題で話に花が咲きます。私どもは決してそれが絶対的にそうだというのではなく、それぞれが相対的なものである、ということとはわかっていながら、つい断定的なものいい方をしがちなものです。ちょうどはげ頭のようなもので、頭の毛がうすくなる過程をとおしてはげ頭が進行するのですから、それと同じよ

うに子どものひねくれも過程的に、もっと具体的に説明される必要があるのですが、それが大変骨の折れることなので、その骨折りをやめてきめつけ主義がまかり通ってしまうのです。これでは決して教育的効果をあげることはできません。

二、どんなことにも基本的に対立したものがふくまれているので、それを統一しなければならぬという考え方について

Aという子どもとBという子どもは仲が悪いと仮定いたしました。ではどう考えてもこの二人の子どもは仲が悪いのでしょうか。仲が悪いに対立したものとして仲の良いということがありますが、この二つの対立物はとても相いれることはできないでしょうか、そうではありません、それは対立していても統一ができ、統一しなければなりません。それが教育というものです。心理学者がよくやるソシオメトリーの技法で、子どもの離合集散を記録して集団構造などについて調査をしますが、あれは教育をする上の参考資料にはなりません、教育そのものとは別のところにあるものだと、いうことを忘れない

てください。仲の悪いAとBは条件的で一時的そして相対的なものであり、状況が変われば、状況を変える努力をすればAとBは仲良くなるものなのです。ここでもまた私どもはこうした状況を変える努力が大変なので、ついでばらをきめこんで「ほんとにこまったものです、AちゃんとBちゃんは仲が悪くて」という説明や理解で済ましがちになります。

三、物ごとをたがいにきりはなして、それだけで考えるのではなく、いつも他の物ごととの相互関連において考えなければならぬ という考え方について

幼児教育にかぎらず、すべてのことについて、こうした考え方が必要であることは誰でもよくわかっているはずですが、子どもたちのあれこれの生活について話し合ったり、ある子どものやりにくい保育に頭を悩ましているうちに、ついその子どもや子どもたちの生活の一面面だけに気をとられ、それとちがった側面や、子どもを取巻くちがった条件や要因と関連させて考えることを忘れてがちです。そうなると、また例によって、いつもの悪い癖がでてきて、出来上りの言葉がでてくるのです、すな

わち「この子どもは発達がおくれているのですわ」と。これでは心理学や教育学の用語が教師や保育者のために逃げ道を提供しているようなもので、現実解決のためにはなんの力も与えないことになってしまいます。

四、物ごとを、その運動、生成、消滅において考えるという考え方について

私どもはとかく、子どもがこんなことをするようになった、こんなことをしたというような側面を問題にします、そのことじたい決して間違いいはありませんが、もう一つの側面、すなわち、子どもがこんなことはしなくなったという側面をいうこともまた大切なことです。この問題は脳生理学の分野で、神経支配に関連させて考えると結局興奮と抑制の問題や消去の問題にかかわり合いのあることで、正しい興奮がたつたわるためには抑制が正しく働くようにならねばならないし、子どもの行動のステレオタイプ（常同型）の形成（簡単に習慣の形成とっておきましょう）において状況に合わないものがすこしずつ消滅し、新しいものがじょじょに作り上げられ、ある時期になると突然新しい様相にかわるのです。こう

した考え方で子どもの発達を見るためには、根気強い系統的な観察が是非必要になってまいります。子どもの発達の過程というものは、いつも同じ変化の循環をくりかえしつづけているものではなく、何か新しいものがたえずあらわれ、その反面古いものが消滅しながら、一つの段階から次の段階へと前進していくものなのです。

五、量的変化から質的变化への転化という考え方

まず自然界の姿を考えてみましょう。たとえば毛虫がだんだん大きくふとくなり、それから自分でマユをつくり、最後に蝶になります。量的変化から質的变化への転化がはっきりわかります。子どもの精神的発達に關してこんなはつきりした転化をみることはできませんが次のような状況をよく観察しますとこの考え方がやはり適用できると思います。すなわち、これまでブランコに他の子どもが乗っている所にかけていった子どもAは、なにがなんでもぼくが乗りたいから、おりてくれといってきかない。そんなことを繰返しているうちに、ぼくが乗りたいが、他の子どもも乗りたいのだということを見ます、それも度々のけんかや意地悪を通してです。こう

したことがたび重なると、教師のアドバイスがきつかけとなつて、そうだ順番をきめ、待つことをすればあらさもなく必ず乗ることができるようになるのだということを見ることができるようになります。ブランコに乗るといふことと、一台のブランコに数人の子どもがあらうことなく乗るためのルールを作るといふことは質的にちがったことなのです。こうしたことはとりもなおさず精神発達の事実であり、こうした姿を幼児の教育の過程で、個人的にも集団的にもたしかめていく必要があります。

六、物ごとの様々な過程であらわれる矛盾およびその矛盾の結果やあらわれ方を理解することによつて、物ごとの過程を理解することができ、またそれを統御することができるという考え方

なんの矛盾もなく同じことが繰返されている姿を想像することはできても、現実に同じことが繰返されている過程などというものは一つもありません。子どもたちは、ある時間空間の中で、それぞれその要求をみだしますが、次の瞬間には新しい要求が生まれます。ですから子どもの心はいつも同じところにとどまらないで、変化いたし

ます。どんなクラスにも力づくで他の子どもを自分の配下に従えて、荒々しく振舞うボスの存在がおるものです。こうした子どもは、言葉も荒々しく、「おいもって来い」だとか「これやれ」だとか命令的口調です。こうしたボスの存在をどのように統御し教育したらいいか教師の頭痛の種になります。こうした子どもは教師の意図の裏をかいて、子どもたちの遊びの場をかき乱し、教師を手こずらせます。こうした場合その子どもに対して、「いい」としてそんなことをするのですか、やめなさい、いけません」を繰返しても決して効果はあがりません。それよりもその子どもを含めて他の子どもが興味をもってやる活動をたくさん用意し、それを質的に高度なものにしていくことです。

たまたま活発に活動を展開しているグループの中にまぎれこんだボスは、その活動の外にあって気まま勝手にしていたので、その活動のみこめないと、つい他の子どもにも「これどうするか教えろ」ということになります。それに対して他の子どもたちはうまく抵抗します、すると「教えろ」が「教えて」に変化します。そうかんたんにすぐそうなるというわけではありませんが、このよう

にしてこのボスの存在はいろいろな矛盾につき当り、行動をかえていきますので、教師はそのあらわれ方に注意しながら適切な教育を展開していけば、どんな子どもでもボスの存在でなくなっていくものです。いわば子どもを矛盾的状况においこみ、その中で矛盾を発見させる教育とでもいいましょうか。

そのほかさまざまな問題がありますが、予定の紙面の都合でペンをおきます。

